

文芸OGネットワーク通信

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
 共立女子大学文芸学部劇芸術研究室内 文芸OGネットワーク
 URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
 代表 多田 久恵 発行：2019.9.28

vol. 31

第16回 文芸サロン講座 開催

5月25日の総会の後に行われた今回の文芸サロン講座は、共立女子大学名誉教授、前学長の入江和生先生に「女と男はこんなにも違うー英米女流作家に学ぶー」と題してご講演いただきました。会員の大浦和子さんに感想を書きいただきました。



テーマの趣旨は「女性作家が描く女性と男性作家が描く女性の違い、女性作家が拒絶する(社会通念としての)『女らしさ』」。

タイトルからして興味津々でした。男性作家は美しく優しく結婚願望があるとして女性を描こうとするが、女性作家はそういう「女性らしさ」に抵抗しようとする……。

挙げられた何人かの女性作家の作品の中で衝撃的だったのがケイト・ショパンという人の短編「一時間の物語」でした。作品中に「結婚式はこの世で最も嘆かわしい光景の一つだ」とあるということで、この過激な言葉以上に小説の結末は…是非お読み下さい！

挙げられた女性作家たちは結婚を不幸なものとして捉えているとのことでした。

英米のことはいざ知らず、日本では(でも?)、未だに妻を手下であるかのように扱う夫がチラホラいることからして能力ある女性の怒りみたいなものは十分理解できます。でも、そうでない男性もごく身近に見ることもあり、みんなが結婚イコール不幸の認識を持てば、益々少子化路線まっしぐらだなあと全くトンチンカンな感想をチラリと抱きました。

講演後の質疑応答で「これら女性作家の中にジェーン・

オースティンが入っていないのはどうしてでしょうか？」と、同期で私にとっては物識り博士みたいなKさんから質問がありました。いつもながら質問の内容でその人の知的レベルがわかるなあと感じました。また質疑応答での講演者のお話が講演と同じくらい興味深いことはよくありますが、この日もそれに近いものがありました。

まさにKさんの質問で、先生が講座に挙げる女性作家の人選にいかにか苦悩されたか…、ジェーン・オースティンとヴァージニア・ウルフは昨日までは入っていたが涙を呑んで……。オースティンとウルフを語るには絶対的に時間が足りないということのようでした。

私は在学中、入江ゼミでシェイクスピアの講義ばかり聴いていたので、先生が語るオースティンは新鮮そのものでした。今回時間的な都合で泣く泣く(?)落選させたオースティンとウルフ。次回この2人の女性作家を取り上げていただき、2人が描く女性についてのお話が聴けたらと期待を膨らませたサロン講座でした。興味深いがご講演ありがとうございました。

最後に、演題を「男と女は…」ではなく「女と男は…」とされたのは先生の女性への敬意では?と、元共立乙女は心密かにニンマリでした。

大浦和子 (1977卒)

2019年度総会 報告

2019年度の文芸OGネットワーク定時総会と文芸サロン講座が、5月25日(土)、共立女子大学本館1202教室にて開催された。総会は午前11時より開始され、参加者は29名、文芸サロン講座は昼食・懇談をはさんで午後1時半から開かれ、聴講者はOGネット会員以外の来場者13名を含めて46名であった。

総会ではまず、「会報」、「文芸サロン講座」、「演劇資料整理」、「ホームページ」の各担当者から2018年度の活動報告が行われた。「会計」からは2018年度取支報告があり、「会計監査」から了承された。

今年は役員改選の年にあたり、旧役員のあらかたが継続する形で新役員が選出された。

また、2019年度の活動予定としてOGネットは共立祭に参加しない旨の報告があり、「会計」より2019年度の予算案が提示され、承認された。

最後に2020年度以降の活動についての問題点がとりあげられたが、総会の初めに配られた、今後の活動等に関するアンケート調査の意見も含めて検討するとし、結論は今後に持ち越された。



代表を再び引き受けて

役員の高齢化が進む中、将来の活動縮小を考え続けてきたこの2年間でした。総会で実施したミニアンケートは、「会報」「文芸サロン講座」「演劇資料整理」「学部報送付」の4つの活動について、これまでの評価と将来への提言を問うものでしたが、出席者全員が、ぜひ今後とも続けてほしい、と答えていました。

共立祭への参加は、夜の打ち合わせ会に学生と一緒に5回出席しなければならないことと、前日に3号館から本館へ、演劇資料とバザー品を運搬することが困難になりましたので、今年から参加を見送ろうと決めました。その他の活動は、担当者が元気でいられる限り続けていくつもりであります。なお、今年度は共立祭第1日目

の10月19日(土)にホームカミングデイが予定されています。ご都合のつく方はぜひホームカミングデイにお出かけください。

今後の活動について会員の皆様のご意見、ご要望をうかがいたく、アンケートを実施いたします。ご協力をお願いいたします。

多田久恵 (1970 院卒)





女性の自立と社会的地位向上をめざす建学精神のもと、創立133周年を迎えた共立女子学園。学び舎を巣立ったあと、仕事や家庭、地域など社会の様々なシーンで共立spiritを放っているOGを紹介していきます。

——音楽の世界に興味を持たれたのは、いつ頃からだったのでしょうか？

母がピアノを教えていたこともあって、幼少時から音楽はとても身近な存在でした。物心ついた頃には、様々な楽器に触れていて、すでに小学生の時には、「音楽表現で暮らしたい」と思っていました。曲を作り、幼馴染とデュオを組み、弾き語り活動を始めたのもその頃で、公園に友だちを呼んでライブもしていましたね。みんなでおやつを食べながら音楽を聞いてもらおう…という感じで。

——ずいぶん早い目覚めですね。デュオは、どのようなスタイルだったのですか？

ピアノ・ヴォーカル&ギター・ヴォーカルのユニットで、名前は小学校の音楽室にあった「サボテン」からいただきました(笑)。

2人で音楽活動を続けていくつもりだったのですが、相方のお母様が若くして病気で亡くなられ、彼女は早々に医師になる覚悟を決め、進路変更。私は彼女の思いを引き継ぐつもりで、2人で決めた「サボテン」という屋号で音楽活動を続け、現在に至っています。

——高水さんと音楽、縁の深さを感じずにはいられないエピソードですね。ところで、なぜ文芸学部を選んだのでしょうか？

小さい頃から、作曲は自然にしていたのですが、作詞は苦戦しました。相方が作詞を担当していたので、1人になってからは詞も自分で作らねばならず、詩や小説を読んで、言葉の勉強を始めました。作詞をするうえで、言葉の表現を追求したいという思いと、それを表現するスタンスでもありますので、文学部ではなく、文芸学部を選びました。

——大学時代は、どのように過ごされていましたか。

「チーム屋上」と称して、八王子校舎の屋上に、似た者同士の友人たちとよく集まっていました(笑)。一緒に歌を歌ったり、雑誌を作ったり、好きな本や詩の話をしたり、多くの時間を屋上で過ごしていました。当時の私は、ギターを背負い、短髪にネクタイの装い。女子大では浮いている部類ですよ(笑)。でも、とても楽しい学生生活で、今もその時の友人とは仲良くしています。

高水春菜さんの最新情報はコチラから！

*映画『ハルカの陶』(末次成人監督) 11月全国公開
詳しくは、こちらのサイトをご覧ください。www.bizeneiga.com

——当時も音楽活動はされていたのですよね。

ライブハウスやカフェなどで演奏していました。“音楽の甲子園”のようなヤマハの音楽コンクールに出場して、多摩地区で優勝し、Zeep Tokyoという大きな舞台上で演奏したことも思い出深いです。この頃も将来の夢は、ずっと変わらず「音楽表現で暮らすこと」でしたので、授業でJ-POPの歌詞を研究するゼミやシナリオ創作、発声朗読でのナレーションなど、実技ものを積極的に取っていました。ここで学んだことは、現在の仕事にも大いに役立っています。

また忘れられないのは、先生や友人が音楽活動を応援してくれていて、授業中に私の作品を取り上げてくれたこともありました。嬉しかったですね。

——卒業後は、そのまま音楽の道へ？

両親は、音楽活動そのものは認めてくれていたのですが、「3年くらいはきちんと就職してほしい」と言われていたので、一旦、企業の経理に勤め、きっかり3年で辞めて、それからは音楽活動に専念しています。

——きちんと両親とのお約束を全うされて。では、お仕事について、現在の活動、また、やりがいなどを聞かせてもらえますか。

ギター、ウクレレ、ピアノ、歌の演奏やCD制作といったプレイヤーとしての仕事を軸に、CM音楽では、マクドナルドハッピーセット、ニッポンハム「中華名菜」シリーズ、最近ではナレーションのオファーも増えていて、ありがたいことです。また、夢の一つだった映画音楽*にも関わらせていただいています。こうした仕事を通じて、小説家、漫画家、音楽家、映画監督など、素晴らしい表現者の方々と出会い、共に創作していける喜び、それを受け取ってくださる多くの方々との交流が何よりのやりがいであり、日々感動に溢れています。

——最後に後輩へのメッセージをお願いします。

大学は、文化も知識も出会いもすべてが発見の連続。ぜひ、今しかない、かけがえのない時間を温かい仲間たちとめいっぱい楽しんでください。

——本日はありがとうございました。

聞き手 高橋京子(1989卒)

file 7 高水春菜

Haruna Takamizu

現在、シンガーソングライターとして、ライブ、CD制作、CMソングの作曲、映画音楽、ナレーションなどに関わる一方、ギター、ウクレレの講師としても活躍中の高水春菜さん(2006年文芸学部卒業)。音楽との出会いからシンガーソングライターをめざしたきっかけや大学時代の思い出、現在の活動についてお聞きしました。

Kyoritsu Spirit!

・高水春菜さんホームページ takamizuharuna.com/

・高水春菜さんツイッター <https://twitter.com/takamizuharuna>

連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々⑰ —

今回は第1期生の八木佳代子さんに書いていただきました。

昭和28年に新設された「文芸学部」へ入学した。第一期生になる。

新設なった学部の教授陣は錚錚たる方が揃っていた。新関良三、岡崎義恵、福原麟太郎、金田一春彦、演劇では遠藤慎吾、もう列挙すればきりがなくらいの方々ばかりだった。

立派な先生に恵まれた学生時代だったが何を学んだか、サッパリ思い出すことができない。

可もなく不可もない漫然とした日々を送る4年間だった。

「卒業論文」には苦い思い出がある。早くからわかっていたことなのに、ぎりぎりまで悩みながらもテーマが決まらずひたすら悩んでばかりいた。

友達で幼稚園から小学校まで一緒にその後、共立へ入って再会した人がある。グループの一人として仲良くしているのだが、その人は卒論に「ラフカディオ・ハーン」を選び、卒業してからもずっと勉強を続け、先ごろ集大成として本を出された。そんな人がある中でわたしのそのやっつけ仕事のお粗末なこと、思い出しても冷や汗が出る。

イギリスの詩人「ワーズワース」をテーマを選び、何とか図書館の本をあさりながら、ぎりぎり間に合わせた。

提出した論文に関して面接があった。外山弥生先生は

困ったような、憐れむような面持ちで何か言われたが、もう頭は真っ白で何をどう答えたか忘れた。論文の出来は自分が一番わかっているのだから…。そこで福田陸太郎先生が一言

「ワーズワースの覚えている詩を言ってください」といわれた。一度に全身から血の気が引き、冷や汗がどつと噴き出した。

はじめから何も覚えていないのだから言えるはずがない。何とかお茶を濁して仕上げたもの、頭にはなにも入っていない。

「もう、よろしい」といわれ、どう退席したかその情けない思いは忘れられない。

第二外国語はフランス語を選択した。田辺貞之助先生で毎回フランス小話をしてくださった。軽妙な語り口はまるで落語や漫談を聞いているようで、それにちょっぴりお色気もあり、エスプリの効いた話に人気があった。フランス語は何も覚えていないがただ一つ

“Qu'est-ce que c'est?”(これは何ですか)、一ケスクセ(消す癖)一だった。今は昔、もう何も消す必要もない齢になった。85歳也。

八木佳代子(1957卒)

下村陽子教授定年退職される

文芸学部教授の下村陽子さんが3月に定年退職されました。OG ネット創設時から大学との事務手続きを一手に引き受けてくださっていたのですが、今後は、劇芸術コースの阿部由香子教授に引き継いでいただくようお願い致しました。文芸メディア研究室には大変お世話になりました。劇芸術研究室の助手の方々にはこれからお世話になるかと思えます。どうぞよろしくお願い致します。

著書紹介 伊藤美代子 著『私の歩んだ道』

文芸学部第一期生である伊藤美代子さんは、神奈川県立図書館を皮切りに、県内の図書館に移動と昇進を重ねられ、定年を機に上記のご本を上梓された。自分史とは自分の歩みを振り返るものであるが、同時に、ご両親やご主人、周囲の人々への愛と感謝を綴る物語でもあることがひしひしと伝わってくる。図書館勤務とともに長年続けてこられた福祉活動が、ご趣味である写真によって鮮明に記録されている。



(平成30年9月刊)

掲示板

INFORMATION

◇絵画展のお知らせ

「伊藤和子絵画展」2019年12月11日(水)~17日(火)

会場：小田急新宿本店アートサロン

◇お願い

同封のアンケートにご協力ください。

編集後記

EDITOR'S NOTE

多くの方々のご協力を得て通信を発行しています。思いを伝える表現手段には、言葉、音楽、絵画など様々ありますが、受け手がいるからこそ表現が活きて、双方向の交流が生まれます。通信のご感想、会の継続についてのご意見をお寄せください。(K)